③　書記力の実態で述べたように，これらの語の書記力は極めて低い。（第12表のように，中学3年の正答率は5か年平均49.1%，小学6年の正答率は7か年平均44.1%に過ぎない。）

④　この種の語に対して，従来の改定案はいずれもオ列長音の表記をしているのは，委員会制度によって，一般社会の良識を示したものとして，尊重してよい。

⑤　国語教育研究者33名から，わたしが得た賛否意見のうちで，この補正私案賛成者は，その60.6%で案外低率であるが，これはオ列長音を「お」で示すように原則を変更しようとする別の考え方との混同が影響している部分もあるようである。

〔備考〕

①　もと「を」のかなで，「とを」をトーと発音するのは「十（トヲ）」だけであるが，これを細則第十五の五に補充する。

②　「頬（ホホ）」はホーというのが，伝承の発音ではあるが，近年若い女性の間からホホという新しい発音が生れてきた。もし将来において，これが標準的発音と認められるようになれば，例語から当然除くべきである。

〔付〕　参考文献

①安藤正次著	国語国字問題を説く	昭和23年2月
②金田一京助著 文部省編	現代かなづかいの意義（国語シリーズ8）	昭和27年3月
③三宅武郎著	新旧かなづかい要説	昭和23年7月
④井之口有一著 文部省編	明治以後のかなづかい問題（国語シリーズ12）	昭和28年3月
⑤文部省著	国語審議会の記録 ——現代かなづかいの制定から国語白書まで——	昭和27年3月
⑥文部省著	国語問題問答（国語シリーズ14）	昭和28年3月
⑦　同	国語問題問答第3集（国語シリーズ26）	昭和30年3月
⑧文部省国語課著	現代かなづかいの書記能力に関する実態調査報告	昭和24年2月
⑨　同	同	昭和25年10月
⑩　同	現代かなづかいの書記能力に関する実態調査抄 （「義務教育における漢字習得に関する調査報告」所収）	昭和26年7月
⑪井之口有一著	実態調査に基く現代かなづかい学習指導法の建設	昭和28年9月
⑫時枝誠記	国語仮名づかひ改定私案	昭和23年3月 「国語と国文学」所収
⑬大岩正仲	「現代かなづかい」批判	昭和23年5月 「国語と国文学」所収
⑭マッサカ・タダノリ	長音かなづかい	昭和23年10月 「コトバ」所収
⑮服部四郎	「現代かなづかい」批判	昭和25年2月 「国語と国文学」所収
⑯大岩正仲	長音かなづかいの再吟味	昭和26年5月 「音声研究」所収
⑰井之口有一	「現代かなづかい」を修正するならこうしたい	昭和30年12月 「国語学習指導法の再建」

「おおかみ（狼）」「こおり（氷）」「おおきい（大きい）」など14の例語は，オ列長音と認めてうを付けて書くことに改める。

したがって，細則第九条からこれらを削り，次の各条のオ列長音の項に分属させるように補正したい。

① 細則第十二

五，おほをおうと書くもの

おうかみ（狼）　おうやけ（公）　しおうせる（為遂せる）　おうい（多い）　おうきい（大きい）

② 細則第十三

九，こほをこうと書くもの

こうり（氷）　こうろぎ（蟋蟀）　とどこうる（滞る）

③ 細則第十五

四，とほをとうと書くもの

とうる（通る）　とうい（遠い）

五，とををとうと書くもの

とう（十）

④ 細則第十七

七，ほほをほうと書くもの

ほうずき（酸漿）　ほうのき（朴の木）

⑤ 細則第十九

四，よほをようと書くもの

もようし（催し）

補正理由要約

① 「現代かなづかい」では，前掲の語類のなかの「オ列のかな＋お」(歴史的かなづかいで「オ列のかな＋ほ〔または「を」〕)という様式で表記される音韻を，長音 /oo/ でなく連母音 /o'o/ と認めて，大阪は「おおさか」と単音の表記をし，逢坂山はオ列長音として「おうさかやま」と書き分けてある。(同様に遠山氏は「とおやまし」，頭山氏は「とうやまし」，冷し氷は「ひやしごおり」，柳行李は「やなぎごうり」)。

この規定は，ある一部の学説によったものであるが，しかし，オがオ列のかなの下にくると自然に長音になり，普通の音韻意識ではオ列長音と認めるというのが普通の説であるから，細則第九のこれらの例語はオ列長音の書き方による方が合理的でもあり，実用的で簡便でもある。

② これらのうち，「多い」「遠い」は，オ母音の重出 /o'o/ と見られる形もあるのではないかとの疑問も一部にはあるが，「現代かなづかい」の体系としては，オ列長音の例による方が簡便である。

治41年の臨時仮名遣調査委員会への文部省諮問案，大正13年の臨時国語調査会案など――いずれも，これらの語類をオ列長音として取扱っている。

たとえば，明治38年の国語調査委員会の答申案では，「於列ノ仮名ニふ又ハほガ附キテ其長音ニ発音スルモノハ於列ノ仮名ニうヲ附ス」（国語仮名遣改定案の修正案第二十二条）とし，「ほ」がついてオ列長音に発音するものの例として，「おうきい（大）」以下「現代かなづかい」の例語と同じ14語をあげてある。

大岩正仲氏は，連母音表記をとる「現代かなづかい」を批評して，『あるいは，「わう」「あふ」は「オ列長音」であるが，「おほ」は長音でなくてオの連音であるとでもいうのかもしれない。それならば，……われわれが全く同じに発音する凹版のオーと，大判のオーとの間に，発音の別があることを証明する責任がある』（「国語と国文学」昭和23年5月号「現代かなづかい」批判 P. 55）と言って，それらの語が共にオ列長音であるとしておられる。

また，服部博士は，「この主義（筆者注，オ列長音はオ列のかなにうを付けて書く方式）を一層徹底させるために，例外の単語も規則的に，とう（十），おうかみ（狼），おうきい（大），おうやけ（公），こうり（氷）……と書いた方がよいのは当然のこととなる」（「国語と国文学」昭和25年2月号「現代かなづかい」批判 P. 4）と言って，「現代かなづかい」でオ列のかなに「お」を連結する表記によって示される場合も，オ列長音であるとしておられる。この服部博士・大岩氏の見解が普通な説であると思う。

さらに一般人たとえば義務教育卒業者もしくは義務教育の対象者に，オ列のかなに「う」を連結する表記によって示される場合(本則的規定の場合)と，「お」を連結する表記によって示される場合とが，どんな音であるかと聞いて見ると，ともにオ列長音であると答えるのが普通である。そこでわたしは，服部博士などの見解および，一般人の音韻意識，さらに連母音として「お」をつけて書く現規定に対する書記力がきわめて低率であることなどから，両者ともにオ列長音の表記に従うべきであると考える。

それは，歴史的かなづかいの完全な習得者においては，歴史的かなづかいでオ列長音を(Xo-ho）と表記される語においては，（Xo）または（Xa）にうまたはふを連結する表記にたいする排除の「慣れ」があるから，オ列長音を（Xo-'u）と表記することに，抵抗を感じるであろうが，歴史的かなづかいを知らない新しい世代においては，そうした抵抗がないから，オ列長音をふくむ語の大多数に用いられる(Xo-'u)という表記に同化されて，第11表のように，（Xo-'u）と書き誤るものが極めて多いのである。

新しい世代にとって，（Xo-'u)・(Xo-'o)―/Xoo/ という複雑な表記体系は無意味であって，歴史的かなづかいにおける習得者の困難を，一部分持ち込んでいるだけであると考えられる。

音韻と文字とを一対一に対応させるという「現代かなづかい」の原則にできるだけ近づけて，簡便な表記法を確立するため，したがって，つまり表記の習得の負担を軽くするためにも，(Xo-'u)・(Xo-'o)―/Xoo/という表記を統合して，（Xo-'u)―/Xoo/ と変えるべきである。

(2)　「大きな」「氷」などの語類のかなづかい補正私案

「現代かなづかい」の細則第九で，オに発音されるほはおと書くとして挙げた例のうち，

小教官	どおり	お				27年8月 55.0±5.0		29年8月 75.0±3.1		65.0		
	どうり	う				45.0		20.0		32.5		
	どをり	を				0		2.5		1.3		
	どほり	ほ				0		0		0		

第12表　「おおきな」「こおり」「どおり」3語平均の年度別学年別正答百分率

	23年3月	24年7月	26年3月	27年3月	28年3月	29年3月	30年3月	平　均	小　5	小5・6
小　6	45.6	35.1	41.1	50.9	38.8	40.0	34.0	44.1	43.2	44.5
中　3			50.9	53.0	59.8	40.2	40.6	49.1		
短大1回生					83.7	75.0	72.1	76.9	短大は各4月	
小教官				75.0		88.3		81.7	教官は各8月	

2. 「大きな」「氷」などの語類のかなづかいに対する制定者の見解

「現代かなづかい」の制定者は，オ列のかなに「お」を連結する表記によって示される音韻は，ホから転化した方は先行の母音オがあっても，/ookami/（狼）/kooLi/（氷）/tooLu/（通る）などのように，先行母音と一つになってオ列長音となることはなくて，/o'okami/ /ko'oLi/ /to'oLu/ のように切れ目があり，連母音である。それはちょうど /ku'u/（食う）/su'u/（吸う）/nu'u/（縫う）の場合と同様であると考えている。

この見解について，文部省はその著「国語問題問答・第3集」で，次の質問，

『大多数の長音は「う」で表わすのに，少数の語だけ「お」を使うので，その使い分けがたいへんむずかしいのです。それでは旧かなづかいを知らなければ新かなづかいが書けないではありませんか。』に対し，次のように答えている。

「大」などを「おう」としないで「おお」と書くのは，旧かなづかいが「おほ」であるからというわけではなく，その発音が長音でなくて（オオ）であるからという認定のもとにそう書くことになったのですが，実際にはその発音の区別がたやすくつかないので，現代かなづかいにおける一つの悩みになっていることは事実です。しかし，その類の語は数が少なく，かつ漢字に隠れることが多いので，日常の用にはあまり不便がありません。長音とまぎらわしい語は次の20語ぐらいですから，教師としてはこれだけを覚えておけばよいわけです。

おおい（多い），おおきい（大きい），おおう（覆う），おおかみ（狼），おおせ（仰せ），おおむね（概ね），こおり（氷・郡），こおる（凍る），こおろぎ（虫の名），とお（十），とおい（遠い），とおる（通る），とおり（次のとおり），いきどおる（憤る），とどこおる（滞る），ほお（頬・朴），ほのお（炎），もよおす（催す）

3. 「大きな」・「氷」などの語類のかなづかい補正私案

(1)　「大きな」・「氷」などの語類のかなづかい補正意見

「現代かなづかい」で，「大きな」・「氷」などの語類をオ列長音でなく，連母音であるとしたのは，従来のかなづかい改定諸案には見られなかった新しい認定である。

従来のかなづかい改定諸案では――明治38年の文部省諮問案，国語調査委員会の答申案，明

第11表②　こおり（氷）の正誤百分率

被調査者	調査題	調査事項	23年3月	24年7月	26年3月	27年3月	28年3月	29年3月	30年3月	平均	備考	
											小5	小5・6
小6	こおり	お	46.3±0.5	33.0±0.4	41.1±6.6	59.7±6.5	38.8±7.0	46.0±7.0	34.0±6.6	42.7	46.2	46.3
	こうり	う	46.6	52.0	42.9	35.1	59.2	52.0	56.0	49.1	29.1	28.0
	こをり	を	13.4	11.1	8.9	5.3	2.0	0	4.0	6.4	11.6	12.6
	こほり	ほ	10.8	2.4	1.8	0	0	0	6.0	3.0	11.1	10.9
中3	こおり	お			54.5±6.7	56.8±6.8	64.1±7.7	34.1±7.1	58.7±7.3	53.6		
	こうり	う			27.3	36.5	33.3	45.5	39.1	36.3		
	こをり	を			9.1	4.5	2.6	11.4	2.2	6.0		
	こほり	ほ			6.8	2.2	0	0	0	1.8		
短大1	こおり	お					28年4月 95.1±3.7	29年4月 88.6±4.8	30年4月 83.8±6.2	89.2		
	こうり	う					4.9	4.5	16.2	8.3		
	こをり	を					0	6.8	0	2.3		
	こほり	ほ					0	0	2.7	0.9		
小学教官	こおり	お				27年8月 87.0±1.1		29年8月 92.5±4.1		89.8		
	こうり	う				12.0		2.5		7.3		
	こをり	を				1.0		0		0.5		
	こほり	ほ				0		2.5		1.3		

第11表③　どおり（通）の正誤百分率

被調査者	調査題	調査事項	23年3月	24年7月	26年3月	27年3月	28年3月	29年3月	30年3月	平均	備考	
											小5	小5・6
小6	どおり	お	29.6±1.3	13.8±1.0	16.1±4.9	24.7±6.1	16.3±5.1	12.0±4.6	12.0±4.6	17.8	23.7	26.8
	どうり	う	46.6	74.0	80.4	73.6	77.6	82.0	84.0	74.0	51.7	49.0
	どをり	を	7.7	6.1	1.8	0	2.0	2.0	2.0	3.1	7.5	7.6
	どほり	ほ	15.2	0.1	0	0	0	0	0	2.2	14.8	10.6
中3	どおり	お			27.3±6.7	25.0±6.5	25.6±4.7	18.2±5.8	6.5±3.6	20.5		
	どうり	う			63.6	70.5	71.8	72.7	91.3	74.0		
	どをり	を			4.5	4.5	0	4.5	0	2.7		
	どほり	ほ			0	0	0	0	0	0		
短大1	どおり	お					28年4月 65.7±7.4	29年4月 38.6±7.3	30年4月 43.2±8.1	49.2		
	どうり	う					31.7	54.5	56.8	47.7		
	どをり	を					0	2.3	0	0.8		
	どほり	ほ					24	0	0	0.8		

1. 「大きな」「氷」などの語類のかなづかいの書記力の実態

この実態調査はさきに示した「調査方法」と同じ方法によったものであるが，第11表・第12表のように，この語類の書記力は格段に低率である。

すなわち第12表のように「おおきな」・「こおり」・「どおり」（予定どおり）の3語の平均正答率は，小学6年は44.1%で，7か年のうちで，50%以上はわずかに27年3月一回（50.9%）だけである。また中学3年でも，平均正答率は49.1%に過ぎない。これは第11表のように，7か年平均%が小学6年では，「こおり」42.7%に対して，「こうり」と書いたものが49.1%，「どおり」17.8%に対して，「どうり」74.0%と「う」をつけて書くものの方が多いからである。

この傾向は，中学3年にも続き，第11表のようにその5か年平均%が，「こおり」53.6%に対して，「こうり」36.3%，「どおり」20.4%に対して，「どうり」74.0%である。「う」をつけて書く傾向は，3語中「通り」が最も強く，次が「氷」，次が「大きな」の順になっている。

この語類の正答が小学6年・中学3年ともに数年間平均して，50%にみたないのは，この規定が学習者に理解し習得し使用しにくいことによると断じるよりほかないと考えられる。

第11表　おおきな（大）・こおり（氷）・どおり（通）の正誤百分率とその標準偏差

第11表①　おおきな（大）の正誤百分率

被調査者	調査題	調査事項	23年3月	24年7月	26年3月	27年3月	28年3月	29年3月	30年3月	平均	備考 小5	備考 小5・6
小6	おおきな	お	60.8±1.4	58.6±1.4	66.1±6.3	68.4±6.1	61.2±7.1	62.0±6.9	56.0±2.2	71.9	59.7	60.4
	おうきな	う	8.4	16.3	17.9	14.0	32.7	14.0	22.0	17.9	7.9	8.2
	おをきな	を	5.7	6.2	7.1	3.5	0	14.0	8.0	6.4	11.0	8.2
	おほきな	ほ	17.7	5.7	0	0	2.0	0	0	3.6	15.3	12.1
中3	おおきな	お			75.0±2.1	77.2±6.3	89.7±4.9	68.2±7.0	56.5±7.3	73.3		
	おうきな	う			15.9	15.9	10.2	16.0	37.0	19.0		
	おをきな	を			2.3	0	0	0	0	0.5		
	おほきな	ほ			2.3	6.8	0	0	0	1.8		
短大1	おおきな	お					28年4月 90.2±4.4	29年4月 97.7±2.3	30年4月 89.2±5.1	92.4		
	おうきな	う					4.9	0	8.1	4.3		
	おをきな	を					0	0	0	0		
	おほきな	ほ					4.9	2.3	2.7	3.3		
小教官	おおきな	お				27年8月 83.0±3.8		29年8月 97.5±0.8		90.2		
	おうきな	う				9.0		2.5		5.8		
	おをきな	を				0		0		0		
	おほきな	ほ				3.0		0		1.5		

一字ずつ孤立させて読まないで（「拾い読み」でなくて），（Xo'u）または（Xo'o）をまとめて切り取るいわば「まとめ読み」をしなければならない。ところが，(Xo-'o)—/Xoo/ という表記であると，次のように，同一の文字おが続くと，「拾い読み」になる傾向に抵抗して，「まとめ読み」しなければならない。

こおお　{/ko'oo/ 呼応，　そおおお　/soo'oo/　相応，
　　{/koo'o/ 好悪，

ほおおお　/hoo'oo/ 法王，とおおお　/too'oo/ 東欧，

ところが，「こおう」・「こうお」・「そうおう」……のように，文字の質が変化すると，「まとめ読み」が容易になる。

(3) 結　　語

以上述べたことを要約すると，オ列長音の表記として，候補に挙げられるのは，（Xo'o）と（Xo'u）である。（Xo'u）の「拾い読み」/Xo'u/ よりも，（Xo'o）の「拾い読み」/Xo'o/ のほうが，オ列長音に近似している。しかし /Xo'u/ はかなりオ列長音に近似しているから，第9表・第10表のように，習得の負担は，大きくなく，正答率は極めて高い。

(Xo'u)—/Xoo/（オ列のかな＋う）という表記に慣れると，*(Xo'o)—/Xoo/（オ列のかな＋お）というオ列長音表記を圧倒してしまうほどである。そして，(Xo'o)—/Xoo/ という表記の場合には，/o/ /'o/ が続いて現われる語において，「まとめ読み」が困難になる。

さらに，歴史的かなづかいにおいて，(Xo) または（Xu）にうまたはふを連結して，オ列長音を示す場合が大多数であって，その表記に従った語において，(Xo'o)—/Xoo/ と表記することは，歴史的かなづかいの習得者には不自然に感じられるという歴史的過渡的事情やオ列長音書記力の実態などをも考慮に入れると，(Xo'u)—/Xoo/（オ列のかな＋う）というオ列長音表記を定めることは妥当であると考えられる。

〔注〕* (Xo'u)— Xoo/ という表記にたいする「慣れ」によって，(Xo'o)—/Xoo/ という表記が排除されるのであるが，「慣れ」の影響を除くために，被験者に（Xo-'u）という表記だけでなく，(Xo-o)，(Xo-'o)，(Xo'u)……などの表記を並行して習得させ，そして，そのうちから，/Xoo/ と連合するのに，抵抗の小さいものを選んで書かせたら，(Xo-o)<(Xo'o)<(Xo'u)<……という序列になるであろう。

その小規模な実験を，実際に行うことができる。いわゆる外来語の領域は固有語・漢語の領域と区別されるから，(Xo-'u)—/Xoo/ という表記の同化傾向は外来語の領域には及ばない。

そこで外来語の領域において，(Xo-o)—/Xoo/ という表記を除いて（「慣れ」の影響があるので），(Xo'u)（Xo'o）という外来語の領域の外にあった表記を持って来て，わたしに外来語を表記させ，（もちろん，原語の音価に近似した表記でなく，外来語の音価に従って）自然に感じられる表記を選ばせると，わたしは（Xo'o)<(Xo'u)<……の順序で選択する。例，プロオグ<プロロウグ<……，コオス<コウス<……，クロオズ<クロウズ<……。

Ⅲ　「現代かなづかい」における「おおきな」（大）・「こおり」（氷）などの語類の表記に対する批判

/Xa'u/ /Xo'u/ /Xe'u/ /Xu'u/ /Xi'u/ /Xo'o/ /Xa'a/ /Xo'a/ /Xe'a/ /Xu'a/ /Xe'e/ /Xe'i/ /Xi'i/ は，意味論的切れ目にまたがってだけ現われる。

したがって，/Xa'u/ /Xo'u/ ……とオ列長音との対立によって区別される一組の Words の数は，ともに出現の自由な音韻同志の場合よりも小さくなる。それでオ列長音を(Xa'u)(Xo'u)……と表記した場合に，オ列長音であるのに，/Xa'u/ または /Xo'u/ ……と読めば，無意味になるため，一義的に文字と音韻の対応が決定される場合が大多数である。そして /Xa'u/ または /Xo'u/……の出現する場合のうち，オ列長音と対立しない場合は，/Xa'u/ または /Xo'u/ ……であるのにオ列長音に読めば，無意味になって，一義的に文字と音韻の対応が決定される。

その残りの少数の，/Xa'u/ または /Xo'u/ ……←→/Xoo/ によって区別される一組の Words のある場合には，Context によって，/Xa'u/ または /Xo'u/……か /Xoo/ のどちらかに決定される。

以上，オ列長音について，文字と音韻の一対一の対応の原則を可及的に満足させるところの表記を決定した。

② 習得しやすく使用しやすい表記

次に習得の負担を軽くするために，もう一つ必要な条件は次のようである。たとえば，次に述べるように，かな連結「こう」において，この示す音韻 /ko/ と文節の最初において，うに対応する音韻 /'u/ とを，機械的に連結した読みいわば「拾い読み」/ko'u/ と /koo/ とが近似していて，文字と音韻の連合に抵抗が小さいということである。「拾い読みの音価」/Xa'u/ /Xo'u/……のうちで，/Xo'o/ がもっとも /Xoo/ に近似している。その次に近似しているのは，/Xo'u/ である。たとえば，差異 /Xa'u/—/Xoo/（ここで差異というのは，音韻に所属する音声の運動表象・聴覚表象の差異）は，差異 /Xo'u/—/Xoo/ よりも大きい（/a'u/ と /oo/ とは，共通部分を持たないのに対して，/o'u/ と /oo/ とは，共通部分 /o/ を持つから)。また差異 /Xo'a/—/Xoo/ は，差異 /Xo'u/—/Xoo/ よりも大きい。(/o'a/ および /o'u/ と/oo/ において，差異 /a/—/o/ は，差異 /u/—/o/ よりも大きい。/o'a/ をぞんざいに発音すると，〔ɔa〕になるのであろうが，そうすると〔o:〕との差異がさらに大きくなる。)

歴史的かなづかいの（Xo-hu）の「拾い読みの音価」/Xohu/ よりも /Xo'u/ のほうが，/Xoo/ に近似する。（/hu/ よりも /'u/ のほうが /o/ に近似するから）

また三宅武郎氏は長母音と連母音に対する見解から，オ列長音にはうをつけて書くことについて，『私見では，長音・二重母音は準閉音節とも見るべきものであって，それを〔オオ〕〔エエ〕というふうにかくことは，かえってその発音事実にも語感にもそむくと思うのである。結論として，オ列長音をあらわすのに「う」をもちいることを本則とし，また「敬礼」などの字音語を「けいれい」というふうにかくようにした新かなづかいの約束はかなカン字文の立場においては妥当なかき方である。』(「新旧がなづかい要説」P. 31～32）と言っておられる。

③ オ列のかな＋オ型の欠点

（Xo'u）または（Xo'o）における（'u）（'o）は孤立して /o/ を示すのではなく，（Xo）に結合することによって始めて /o/ を示すのであるから，オ列長音の表記を読む場合には，

でしょお			2.2		0.7	0	0	0	0	0		0	0
でせう			16.7		2.9	0	0	0	0	0		4.5	2.7
でしゃう			6.4		0.6	0	0	0	0	0		0	0
でしう			2.6		0.7	0	0	0	2.3	0		0	0
きょう	きょう	78.3 ±1.3	79.8 ±1.2	89.0 ±0.7	91.5 ±0.8	96.0 ±2.8	93.2 ±3.8	94.0 ±3.4	100.0 ±1.5	99.0 ±1.0	97.5 ±2.5	93.1 ±3.8	94.6 ±3.6
きょお			3.2		0.9	0	0	0		0	0	98.0	0
けふ			9.0		0.9	0	0	0		1.0	0	0	2.7
けう			2.8		0.6	0	0	0		0	0	4.5	0
きょを			0.8		0.5	0	0	0		0	0	0	0
きょ			1.5		3.2	2.0	6.8	4.0		0	0	0	0
総平均	(正答)	80.7	83.1	89.2	91.1	94.4	92.8	95.8	97.8	98.1	98.3	96.5	97.8

学6年が54.0と高い。

なおこの百答百分率の標準偏差は正差率の変動の度合を示すから，この大きいことは個人差の大小を示す。またこの項では拙著「実態調査に基く現代かなづかい学習指導法」を参照されたい。

3　「オ列のかな＋ウ型」の表記は，実用的立場において妥当である

(1)　棒引長音符は実用化が困難

音韻と文字とを一対一に対応させるという「現代かなづかい」の原則を，最大限に実現する長音符号は，いわゆる棒引である。しかしこれには強い反対があり，実施は困難である。

たとえば明治33年から実施の新定字音かなづかいと，明治38年の諮問案には，長音符として棒引「ー」を用いてあるのに対して，反対者がはなはだ多かった。その反対論は，次のようである。

① 棒は国語の音を表わすのにふじゅうぶんである。国語の音の中には長音に似て，しかもその実，イ ウ 等の韻を持つものがあるから，字音かなづかいと国語かなづかいとに通じる統一的棒引法は採用しがたい。

② 棒は符号であって，文字ではない。

③ 棒は平がなとの調和を欠く。

④ 横書きのとき漢数字と混同しやすい。

⑤ 棒は文字美を害する。

(2)　ほかのモーラを示すかなのうち，実用的に妥当なものを決める

そこで，オ列長音だけを示す文字を用いることが，実際上できないとすれば，オ列長音以外の音韻を示す文字の字形たとえば「お」とか「う」とかを利用することを考えなければならない。

①　音韻主義を可及的に満足させる表記

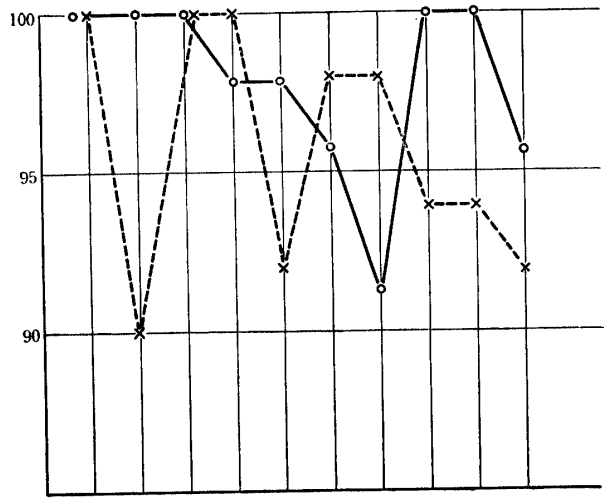
文字と音韻の一対一の対応の原則（習得の負担を軽くすること，音韻の標差的機能を反映することのために必要である）を，できるだけ実現するためには，オ列長音と同一の音韻的環境に出現するモーラの連結が，できるだけ出現について制限を持っているということが必要である。

かえろう	ろう	79.7 ±1.2	84.5 ±1.1	82.1 ±0.8	89.1 ±0.9	88.0 ±4.6	86.4 ±5.2	98.0 ±2.0	91.3 ±4.2	91.0 ±2.9	95.0 ±3.3	93.1 ±3.8	89.2 ±5.1
かえろお			3.6		2.3	0	0	0	0	0	5.0	0	0
かえらう			6.2		0.2	0	0	0	0	1.0	0	0	0
かへろう			23.4		7.8	0	2.3	2.0	0	8.0	0	4.5	0
かえろを			3.7		2.9	0	0	0	0	0	0	0	10.8
かえろ			1.2		3.0	2.0	0	0	0	0	0	0	0
かいろう			2.4		4.4	6.0	4.5	0	2.2	0	0	0	0
たいそう	そう	84.9 ±1.1	85.6 ±1.0	85.4 ±0.7	91.3 ±0.8	94.0 ±3.4	95.5 ±3.1	98.0 ±2.0	95.7 ±3.0	99.0 ±2.6	100.0 ±1.6	100.0 ±1.5	100.0 ±1.6
たいそお			3.5		2.9	2.0	0	0	0	1.0			
たいさう			5.8		0.5	0	0	0	0	0			
たいそを			2.8		1.6	2.0	2.3	0	0	0			
きのう	のう	84.5 ±1.1	85.8 ±1.0	85.2 ±0.8	90.0 ±0.9	88.0 ±4.6	93.2 ±3.8	100.0 ±1.4	100.0 ±1.5	99.0 ±2.9	100.0 ±1.6	100.0 ±1.5	97.2 ±2.7
きのお			5.5		3.7	0	2.2			1.0			0
きのふ			5.4		0.5	0	0			0			2.7
きのを			2.1		2.5	0	0			0			0
きの			0		2.2	6.0	0			0			0
がっこう	こう	83.1 ±1.1	86.4 ±1.0	84.8 ±0.8	91.9 ±0.8	94.0 ±3.4	93.2 ±3.8	90.0 ±4.2	100.0 ±1.5	97.0 ±1.7	100.0 ±1.5	100.0 ±1.5	100.0 ±1.6
がっこお			2.7		1.0	0	0	0		0			
がっかう			7.0		0.3	0	0	0		0			
がくこう			2.0		1.0	0	0	0		2.0			
がっこ			1.1		0.8	2.0	2.3	2.0		0			
かようび	よう	84.8 ±1.1	91.5 ±0.8	88.2 ±0.7	93.6 ±0.7	100.0 ±1.4	95.5 ±3.1	100.0 ±1.4	100.0 ±1.5	100.0 ±1.0	95.0 ±3.3	100.0 ±1.5	100.0 ±1.6
かよおび			3.4		1.4		0				0		
かえうび			2.0		0		0				0		
かよをび			1.7		0.9		0				0		
くゎようび			1.0		0.1		0				0		
かよび			0		1.8		0				0		
(b)オ列拗長音	(平均正答)	74.8	76.8	79.1	90.6	96.0	91.7	93.3	98.6	98.7	99.2	93.9	97.3
ましょう	しょう	71.6 ±1.4	74.0 ±1.3	72.8 ±0.9	90.9 ±0.8	96.0 ±2.8	90.9 ±4.3	94.0 ±3.4	100.0 ±1.5	98.0 ±1.4	100.0 ±1.6	93.1 ±3.8	100.0 ±1.6
ましょお			0.9		0.5	0	0	0		0		0	
ませう			16.7		3.5	0	0	0		2.0		2.2	
ましゃう			5.9		0.5	0	0	0		0		0	
ましょ			0.5		2.1	0	4.5	2.0		0		0	
でしょう	しょう	74.4 ±1.3	76.5 ±1.2	75.4 ±0.9	89.5 ±0.9	96.0 ±2.8	90.9 ±4.3	92.0 ±3.8	95.7 ±3.0	99.0 ±1.0	100.0 ±1.6	95.4 ±3.2	97.2 ±2.7

なお学年別・年度別，調査50項目の平均正答百分率の標準偏差を便宜上±の符号の次に付けた。この標準偏差は正答率の変動の度合を示すから，この大きいことは個人差の大小を示す。

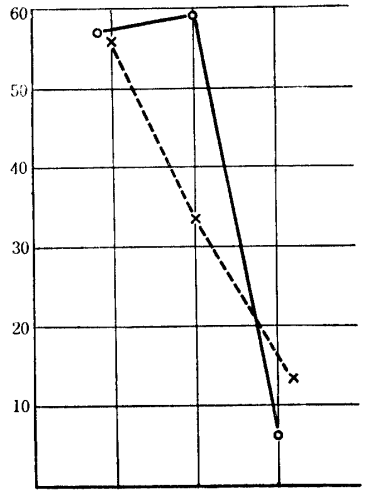
(2)　オ列長音かなづかい書記力の実態

第9表①　オ列長音表記正答%図(30年3月)



	きのう	がっこう	かようび	そうです	ようです	たいそう	かえろう	ましょう	きょう	でしょう	平均
中3 ○—○%	100.0	100.0	100.0	97.8	97.8	95.7	91.3	100.0	100.0	95.7	97.8
小6 ×…×%	100.0	90.0	100.0	100.0	92.0	98.0	98.0	94.0	94.0	92.0	95.8

第9表②　おおきな・こおり・どおり正答%図(30年3月)



	おおきな	こおり	どおり	平均
中3	56.7	58.7	6.5	40.6
小6	56.0	34.0	12.0	34.0

第9表①・第10表で明らかなように，オ列長音7語，オ列拗長音3語計10語について調査した結果，30年3月の正答%は，小学6年が95.8%，中学3年が97.8%と極めて高い。これに対して，この10語を「お」で表記したものは，小学6年が0.2%，中学3年が皆無で，この書記力の実態調査の上からは，「う」をつけて書くオ列長音の現行表記法は，小・中学生にも適したものと断じてよいようである。また9表②・11表のように，「オ列のかな＋お」の平均正答%は，中学3年が40.6，小学6年が34.0で低く，「う」と誤ったものの方が，中学3年が55.8，小

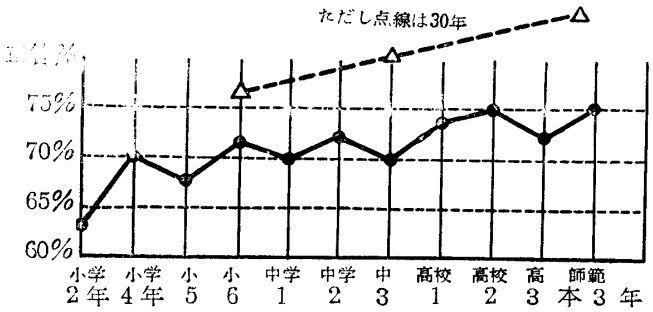
第10表　オ列長音・オ列拗長音かなづかいの正誤百分率とその標準偏差

調査題 正答・誤記	調査事項	23年3月小学5・6年2,263人 小学5年1074人 %	小学6年1189人 %	5・6年2263人 %	24年7月小学6年1172人 %	29年3月 小6年,50人	中3年,44人	30年3月 小6年,50人	中3年,46人	小学教官 27年,100人	29年,40人	短大1回生 29年4月44人	30年4月37人
(a)オ列長音	(平均正答)	83.2	85.8	84.6	91.4	93.7	93.2	96.9	97.5	97.9	97.9	97.7	98.1
そうです	そう	85.0 ±1.0	82.8 ±1.1	83.8 ±0.8	92.8 ±0.5	96.0 ±2.8	95.5 ±3.1	100.0 ±1.4	97.8 ±2.2	99.0 ±1.0	100.0 ±1.6	95.4 ±3.2	100.0 ±1.7
そおです			4.6		1.5	0	0		0	1.0		4.5	
さうです			10.0		0.6	0	0		0	0		0	
そをです			1.4		1.6	2.0	2.3		0	0		0	
ようです	よう	80.7 ±1.2	84.0 ±1.1	82.5 ±0.8	90.8 ±0.8	96.0 ±2.8	93.2 ±3.8	92.0 ±3.7	97.8 ±2.2	100.0 ±1.0	95.0 ±3.3	95.4 ±3.2	100.0 ±1.6
よおです			2.0		3.4	2.0	0	2.0	0		0	2.2	
やうです			9.9		0.3	0	0	2.0	0		0	0	
よをです			2.8		2.4	0	0	0	0		0	2.2	

③　調査の結果とその示唆

（a）　習得の学年的傾向

第6表　学年別成績図（昭和23年）



左掲の「昭和23年における学年別成績図」，および「昭和23年の学年的推移表」は，調査50項目に対する下記調査対象の学年別平均正答%である。

前記調査対象中の(イ)昭和23年の文部省調査，埼玉師範学校が同年5月に行った同附属小学校2・5・6年各100名，同県勝呂郡勝呂小学校2・5・6年各100名の調査，および筆者が同年6月，岐阜市加納小学校2・4・6年各一組，岐阜市長良中学校1・2・3年各一組，岐阜師範学校予科2・3年，同本科1・3年各一組について調査したものである。なおこの調査は，いずれも文部省作成の前記「b調査問題」によった。

昭和23年におけるこの正答成績は，師範本科3年生の75.5%を最高とし，小学2年の63.1%の最低まで，わずかに12.4%の進歩で，学年的推移は，「現代かなづかい」実施後一年とは言え，常識的に見て，あまりにも緩慢な上昇線に過ぎないと言えるようである。

しかし，その後は全般的に成績が向上したようで，たとえば，この図の点線で示したように，昭和30年3月の正答%は，小学6年が76.4%，中学3年が80.0%，また短大1回生の30年4月の正答%は84.8%となり，23年から7年後には，小学6年で5.3%，中学3年で10.4%向上した。

第7表　昭和23年の学年的推移表（正答%）

師範本3	高校2年	高校1年	中学2年	高校3年	小学6年	小学4年	中学1年	中学3年	小学5年	小学2年	平均
75.5%	75.5%	73.6%	72.7%	71.6%	71.1%	70.0%	69.7%	69.6%	67.3%	63.1%	70.9%
1位	1位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位	

（b）　習得の年度別傾向

第8表　年度別正答百分率とその標準偏差

	23年3月	24年7月	26年3月	27年3月	28年3月	29年3月	30年3月	平　均
小学6年	72.7±1.3	73.9±1.3	74.9±5.8	79.4±5.4	81.1±5.6	76.0±6.1	76.4±6.1	76.3
中学3年			76.8±6.4	80.7±5.8	83.4±5.9	77.1±6.3	80.0±4.9	79.6
短大1回生					28年4月 89.1±4.8	29年4月 85.1±5.4	30年4月 84.8±6.1	86.3
小学教官				27年8月 87.2±3.2		29年8月 89.9±4.7		88.6

調査方法の項で述べたと同一方法で調査した上記の結果は，常識的に言って，23年3月から28年3月までは習得率が上昇傾向を示し，今や漸次，安定期に向いつつあるようである。

また，小学6年の7か年間の正答%の平均が76.3%前後，中学3年の5か年の平均が79.6%であり，両者に約3.3%の開きがある。中学3年は小学6年よりは，いくらか，正答率が上昇傾向にあると言えるようである。

生その他を対象にして，文部省と同一問題（次項のb調査問題）について，同一方法で調査した。

(イ) 昭和23年3月，文部省は，(b) に示す調査問題によって，東京都下12校の小学5年生（1,074名），同小学6年生（1,189名）について行った。

(ロ) 昭和24年7月，文部省は，東京都下23校の小学6年生（1,172名）について調査した。

(ハ) 昭和26年3月，筆者は，彦根市旧市内の小学6年生（56名）・中学3年生（44名），各一組について調査した。

(ニ) 昭和27年3月，筆者は，彦根市の(ハ)と同一校の小学6年生（57名）・中学3年生(44名)，各一組について調査した。

(ホ) 昭和28年3月，彦根市の(ハ)と同一校の小学6年生（49名）・中学3年生（39名），各一組について調査した。

(ヘ) 昭和29年3月，筆者は京都市上京区の小学6年生（50名）・中学3年生（44名），各一組について調査した。

(ト) 昭和30年3月，筆者は京都市の(ヘ)と同一校の小学6年生（50名）・中学3年生（46名）各一組について調査した。

(チ) 昭和27年8月，筆者は滋賀県下の小学教官100名について，また昭和29年8月，京都府下の小学校教官40名について調査した。

(リ) 京都府立西京大学女子短期大学部一回生について，昭和28年・29年・30年の各4月に調査した。

（b） 調査問題（文部省作成）

1　なつになると，このいどの　みずは，こおりのようです。
(1) (2) (3) (4) (5)

2　くちでいうのはやさしいが，じっさいにおこなうのはむずかしい。
(6) (7) (8)

3　らいしゅうの　か　ようび　には，ず　がとつづりかたがあります。
(9) (10) (11) (12) (13) (14) (15)

4　うらのはたけでおじいさんが　きゅうりとトマトのなえ　を　うえて　います。きっと　たくさん　なるでしょう。
(16) (17) (18) (19) (20) (21) (22)

5　きのうのじしん　では，にわのいしどうろうがたおれるかと　おもいました。
(23) (24) (25) (26) (27) (28)

6　あめがふっても，うんどうかいは　よていどおりやるそうです。
(29) (30) (31)

7　たいそうのじかんに，ボールが　かおにあたって，はなぢを　だしました。
(32) (33) (34)

8　きょうは　がっこうで　おおきな　かん　づめがふたりにひとつずつ　はいきゅう　になりました。
(35) (36) (37) (38) (39) (40) (41)

9　ゆうがた　かえ　ろうと　おもって　そとへでると，にしのそらに　みかづきが　みえました。
(42) (43) (44) (45) (46)

10　みちをきかれたら，ていねいに　おし　えてあげましょう。
(47) (48) (49) (50)

〔備考〕 調査者が以上10問につき，1問ずつ読みあげ，1回は聞きとらせ，2回目に書きとらせ，3回で訂正させる。調査項目は，傍線の部分の数字を附けてある50項目である。

いずれも「う」をつけて書くことになっている。

① 文部省は明治33年8月公布の小学校令施行規則第二号表に表音的な「新定字音仮名遣」を規定し，たとえば，これまでの「あう・あふ・おう・おふ・わう・をう」は「おー」と書くいわゆる棒引案を実施した。(この棒引かなづかいは明治41年9月に廃止された。)

② そのため，文部省は表音的なかなづかいを国語かなづかいにも及ぼす必要を認めて，明治38年に仮名遣改定諮問案を作成して，国語調査委員会などに諮問した。その諮問案では，オ列長音は用言の活用語尾と助動詞「う」は「う」で示すほかは，「ー」で示すことにした。

③ この文部省の諮問案に対して，国語調査委員会は明治38年11月に答申した。がその答申案では，オ列長音は「う」をつけて書くことに修正した。その後の臨時国語調査会の「仮名遣改定案」(大正13年)でも，国語審議会の昭和17年の「新字音仮名遣表」でも，いづれも「う」をつけて書くことにした。なお明治41年の臨時仮名遣調査会への文部省諮問案では，活用語尾はもとのままにし，オ列長音は活用語尾を除いた以外は「う」で示すことにした。

(2) 「現代かなづかいのオ列長音表記」規定の経過

「現代かなづかい」において，オ列長音を表わすには，オ列のかなに「う」をつけて書くことを本則としたのは，上述の明治38年の国語調査委員会案以来の一貫した方針をこの度も採用したものである。しかし，これを本則として，「お」や「ー」で書くことを許容し，弾力性を持たした点は，従来の諸案には見られなかった新しい方式である。

長音表記について，かなづかい主査委員長安藤正次氏は，「現代かなづかい」を議決した国語審議会第11回総会(昭和21年9月21日)で，「このかなづかいでは，アにはア，イにはイ，ウにはウ，エにはエ，オにはウを採用することにいたしました。これは主として伝統的書記習慣を考慮したからであります。ただしオの場合には，ウのほかにオの使われたのも，かなり古くからのことでありますから，ウを書くのを本則としまして，オの使用をも認めることといたした次第であります。」(文部省著「国語問題問答」P．54)と説明しておられる。

このような経過によって，「現代かなづかい」の「オ列長音は，オ列のかなにうをつけて書くことを本則とする」(備考第五)，「オ列拗音の長音は，オ列拗音のかなにうをつけて書くことを本則とする」(備考第八)との規定が成立したのである。

2 オ列長音かなづかい書記力の実態

(1) 「現代かなづかい」書記力の実態調査

① 調査の目的

「現代かなづかい」一般，およびその問題点(ここでは特にオ列長音および「おおきな」「こおり」など)の習得度，新旧かなづかい混乱の実態を明らかにし，ひいては，その普及方法や「現代かなづかい」規定の改善に資そうとした。

② 調査の方法

(a) 調査対象

文部省は，昭和23年3月・24年7月に，小学6年を対象にして調査した。が，筆者も昭和26年3月以後，30年3月に至るまで5か年間，小学6年・中学3年，その他小学教官・短期大学

づかいの習得者にとって，(Xo−ho) と (Xo−'o) との間には，積極的な排除がないこと，および「ほ」が，かほ(顔)，なほす(直す)，にほひ (匂)……などにおいて，/'o/ を示すので，ほ・お——/'o/ のように，「ほ」・「お」がともに /'o/ を示し，上述の「ふ」と「う」の場合と同様に，親類であることによって，おがほの空位にすわるのが，自然に感じられるのである。

〔注〕 (Xo−o) ——/Xoo/ は，(Xv−v) ——/Xvv/ という表記（それがいわゆる「棒引」である）の特別な場合である。棒引きは，ちょうど，次々に＝次次に，各々＝各各，「ゝ〳〵」＝「ゝゝゝゝ」，「〻〻」＝「〻〻〻〻」のような表記と同じ様式の表記である。だから，棒引きが金田一春彦氏の引き音 /ː/ を示していると考えなければならないとは限らないのである。

(3) ま　と　め

「現代かなづかい」では，歴史的かなづかいで，(Xo−{'u / hu}) (Xa−{'u / hu}) と表記した場合を，(Xo−'u) 〔お列のかな＋う〕と表記することに定め，(Xo−ho) と表記した場合を，(Xo−'o) 〔オ列のかな＋お〕と表記することに定めたのは結局，歴史的かなづかいの習得者が，「現代かなづかい」を習得する場合に，もっとも抵抗の小さいように規定されていると言えるのである。

しかし，国語学の専門家や特に国語に関心を持っている者を除いた多数の人では，(Xo−ho) —— Xoo/ と表記するべき場合が，多数派である (Xo−{'u / hu}) (Xa−{'u / hu}) に同化されて，(Xo−ho)——/Xoo/ という表記の習得率が低く，また9表②のように「オ列のかな＋お」の習得率が極めて低いことは，注意すべきことである。（城戸幡太郎氏著「国語表現学」P. 254・255参照）

Ⅱ　「現代かなづかいにおけるオ列長音表記」の批判

1. オ列長音かなづかいの沿革

オ列長音を表わすには，古くからオ列のかなにフ・ウまたヲ・オを使ってある。また長音符「—」の使用も古くその例が無いのではなく，山槐記 中山忠親 治承二年正月十八日の条に「的懸マート—カケ如此仰也。マ字ト字間長。ト字カ字又同。カケ字サカケサカリ音ニ引ツヽケ仰也。不召的懸名」とある。

さらに新井白石の「東音譜」にも側線を使って，「送声　送声者送気声也。不可以混余声本音不転。以送其気即送声也」とし，「ア イ ウ エ ヲ　カ キ ク ケ コ」と示した例もある。

(1) 従来のかなづかい改定諸案におけるオ列長音の表記

かなづかいを表音的に整理する場合，音韻主義だけでは割り切れないものがある。このいわば例外規定的なものをどう取扱うかは，実行案としては，きわめて慎重を要する重要事である。その取扱い方について，良識を示すものの一つが，各界の学識経験者によって構成された委員会の審議結果である。

次に，文部省または文部省の国語調査審議機関で数度にわたって行われたかなづかい改定の諸案において，オ列長音がどう取扱われたかを見ることにする。

オ列長音表記については，文部省の国諸調査機関で作成した案は，明治33年に小学教育に実施した「新定字音仮名遣」と明治38年の文部省の諮問案とに長音符「—」を用いた以外は，

a'$_3$　**(Xe−{'u / hu})——/X͡joo/

b'　(jo−ho)——/'joo/

漢語においては，a'$_1$〜a'$_3$，固有語においては，a'$_{2\cdot2}$・a'$_3$・b'が用いられる。

なお，オ列長音・オ列拗長音表記の体系を図で示すと，次のようになる。

第5表　オ列長音・オ列拗長音表記体系図

漢語・固有語の領域		かなづかい体系の外部		外来語の領域	
図式	例語	図式	例語	図式	例語
a$_1$(Xo−{'u / hu)，a$_2$(Xa−{'u / hu) ↕ 積極的排除 b (Xo−ho)	おとうと ふくろふ あそばう すまふ おほかみ	(Xo−'o) ↗ 消極的排除 ↙	おおかみ	←→Xo−o	ボール

〔注1〕 ここでは，「よう・やう・えう・えふ」/'joo/，「やう・よほ」/'joo/ も，オ列拗長音として取扱うことにする。

〔注2〕 **「てう・てふ，でう・でふ」の場合には，例外，/t͡joo/ /d͡joo/ のかわりに，/c͡joo/ /z͡joo/ を示す。

2. オ列長音における「歴史的かなづかい」と「現代かなづかい」との関連

(1) 歴史的かなづかいにおけるウ・フ連結型を，「オ列のかな＋ウ型」に統一することは容易

わたしども歴史的かなづかいの習得者は，漢語および——a-〜——o-，——o- という語幹を持つ形容詞＋ございます(高うございます，強うございますなど)，動詞の意志形，しろうと(素人)，きのふ(昨日)……などにおいては，(Xo−'u)(Xa−'u)または(Xo−hu)(Xa−hu)といういわばウ・フ連結型表記に慣らされている。そして，「ふ」は，かふ(買ふ)，さそふ(誘ふ)などの動詞において，/'u/を示すので，ふ・う—/'u/，のように，「ふ」・「う」がともに/'u/を示し，双方はその意味で親類である。

したがって，a$_1$・a$_2$の表記を統合することは，歴史的かなづかいの習得者にとって，容易であるが，(Xo−'o)という表記に変えるとすれば，(Xo)または(Xa)に，うまたはふを連結させるという表記の「慣れ」が抵抗として働くから，歴史的かなづかいの習得者にとっては不自然に感じられるであろう。

(2) 歴史的かなづかいにおけるホ連結型を，「オ列のかな＋ウ型」に統一するのは若干の抵抗がある

一方，おほかみ(狼)，こほり(氷)，とほる(通る)，おほきい(大)……などの(Xo−ho)という表記に従う語類は，上記のウ・フ連結型と対立し，双方の間に積極的排除が働く。

(Xo−ho)たとえば「おほかみ」という表記は，歴史的かなづかいの体系にはない(Xo−'o)たとえば「おおかみ」という「お」による表記，または外来語の領城の(Xo−o)たとえばボールといういわゆる棒引の表記に対しては，対立がなく，(Xo−'o)または(Xo−o)との間に積極的排除は働かない。

だから，仮に(Xo−ho)——/Xoo/という表記を，(Xo−'u)——/Xoo/に変えるとすれば，ウ・フ連結型の表記に対する排除の「慣れ」が抵抗として働くが，それにたいして，歴史的かな

がう（いそがう，長がう）	/ŋoo/	ごう	ごお，ごー
とう（おとうと），たう（勝たう），たふ(たふとい)，＊とほ(とほる)，＊とを（とをか十日）	/too/	とう	とお，とー
ぼう（りくつっぼうございます）	/poo/	ぼう	ぼお，ぼー
はう（はうき），はふ（はふる），＊ほほ（ほほづき）	/hoo/	ほう	ほお，ほー
こう（こうぢ小路）かう（聞かう），＊こほ（こほり 氷）	/koo/	こう	こお，こー
あふ(あふぎ)，わう(よわうございます)，はう(買はう)＊おほ(おほぎ)	/'oo/	おう	おお，おー

〔注〕ただしここでは，＊印の「のほ・とほ・とを・ほほ・こほ・おほ・よほ」の類を長音/oo/としたが，「現代かなづかい」では連母音/o'o/として「オ列のかな＋お」と書く。

② 固有語におけるオ列拗長音の表記（第4表）

歴史的かなづかい	現代語音	備考	
		現代かなづかい	その他の表記
せう（参りませう）	/s͡joo/	しょう	しょお，しょー
てう（てうづ　手水）	/c͡joo/	ちょう	ちょお，ちょー
けふ（けふ　今日）	/k͡joo/	きょう	きょお，きょー
やう（やうか），＊よほ（もよほし）	/'joo/	よ　う	よお，よー

(3) 歴史的かなづかいにおけるオ列長音・オ列拗長音表記の体系

① オ列長音の表記の体系

歴史的かなづかいにおけるオ列長音表記の体系を要約すると，次のようになる。

ウ・フ連結型――オ列のかなに，うまたはふを連結するもの，またはア列のかなに，うまたはふを連結するもの。

ホ連結型――オ列のかなに，ほを連結するもの。

a_1　(Xo－{'u / hu})――/Xoo/　　a_2　(Xa－{'u / hu})――/Xoo/

b　(Xo－ho)――/Xoo/

漢語においては，a_1・a_2，固有語においては，a_1・a_2・b が用いられる。

〔注〕（　）は文字の印，――は対応の印。例，(Xo－{'u / hu})――/Xoo/は，「オ列のかな＋{う / ふ}」が，オ列長音の音韻に対応することを図式化したものである。

② オ列拗長音の表記の体系

以上述べたところの漢語・固有語におけるオ列拗長音の表記様式を要約すると，次のようになる。

ヨ・ウ連結型――イ列のかなに，よを連結したものに，さらにうを連結するもの。（ヤ行の場合は，よにうを連結する）

ヤ・ウ連結型――イ列のかなに，やを連結したものに，うを連結するもの（ヤ行の場合はやにうを連結する）。

エ・ウ，エ・フ連結型――エ列のかなに，うまたはふを連結するもの。

ヨ・ホ連結型――よにほを連結するもの。

$a'_{1\cdot1}$　(Xi－'jo－'u)――/X͡joo/　　$a'_{1\cdot2}$　('jo－'u)――/'joo/

$a'_{2\cdot1}$　(Xi－'ja－'u)――/X͡joo/　　$a'_{2\cdot2}$　('ja－'u)――/'joo/

現代かなづかいにおけるオ列長音表記の問題

① 漢語におけるオ列長音の表記（第1表）

歴史的かなづかい	現代語音	備考	
		現代かなづかい	その他の表記
ほう（奉），はう（方），ほふ（法），はふ（法）	/hoo/	ほう	ほお，ほー
ぼう（某），ばう（傍），ぼふ（乏），ばふ（乏）	/boo/	ぼう	ぼお，ぼー
こう（公），かう（高），こふ（劫），かふ（甲），くわう（光）	/koo/	こう	こお，こー
ごう（后），がう（豪），ごふ（業），がふ（合），ぐわう（轟）	/goo//ŋoo/	ごう	ごお，ごー
おう（応），あう（桜），おふ（凹），あふ（押），をう（翁），わう（王）	/'oo/	おう	おお，おー
ろう（楼），らう（郎），らふ（蠟）	/Loo/	ろう	ろお，ろー
のう（農），なう（脳），なふ（納）	/noo/	のう	のお，のー
とう（東），たう（島），たふ（答）	/too/	とう	とお，とー
どう（同），だう（道），だふ（納）	/doo/	どう	どお，どー
そう（宗），さう（早），さふ（挿）	/soo/	そう	そお，そー
ぞう（増），ざう（蔵），ざふ（雑）	/zoo/	ぞう	ぞお，ぞー
もう（毛），まう（猛）	/moo/	もう	もお，もー

〔注1〕 /hoo/ の /oo/ はオ列長音を示す。なお /ho'o/ の /o'o/ は連母音を示す。

〔注2〕 ここでは，漢語とか固有語とかには，厳密な概念規定を与えない。今の場合常識的な区別で足りると考えられる。漢語におけるオ列長音の表記とは，いわゆるオ列長音の「字音かなづかい」を意味し，固有語におけるオ列長音とは，オ列長音の「国語かなづかい」を意味する。

② 漢語におけるオ列拗長音の表記（第2表）

歴史的かなづかい	現代語音	備考	
		現代かなづかい	その他の表記
よう（用），やう（陽），えう（要），えふ（葉）	/'joo/	よう	よお，よー
きよう（共），きやう（京），けう（教），けふ（協）	/k͡joo/	きょう	きょお，きょー
ぎよう（凝），ぎやう（行），げう（暁），げふ（業）	/g͡joo/ /ŋ͡joo/	ぎょう	ぎょお，ぎょー
しよう（松），しやう（章），せう（少），せふ（渉）	/s͡joo/	しょう	しょお，しょー
りよう（龍），りやう（良），れう（料），れふ（猟）	/L͡joo/	りょう	りょお，りょー
ちよう（重），ちやう（長），てう（朝），てふ（蝶）	/c͡joo/	ちょう	ちょお，ちょー
じよう（乗），じやう（上），ぜう（擾），でう（条），でふ（畳），ぢやう（場）	/z͡joo/	じょう	じょお，じょー
ひよう（氷），ひやう（評），へう（表）	/hjoo/	ひょう	ひょお，ひょー
によう（女），ねう（尿），びやう（病），べう（秒）	/n͡joo/	にょう	にょお，にょー
	/b͡joo/	びょう	びょお，びょー
みやう（明），めう（妙）	/m͡joo/	みょう	みょお，みょー

(2) 固有語におけるオ列長音・オ列拗長音の表記

① 固有語におけるオ列長音の表記（第3表）

歴史的かなづかい	現代語音	備考	
		現代かなづかい	その他の表記
ろう（しろうと），らう（かえらう），ろふ（ふくろふ），らふ（さふらふ）	/Loo/	ろう	ろお，ろー
もう（いもうと），まう（頼まう），まふ（すまふ 相撲）	/moo/	もう	もお，もー
なう（死なう），なふ（納入），のふ（きのふ），なほ（直衣）*のほ（ほのほ）	/noo/	のう	のお，のー
さう（話さう），さふ（さふらふ）	/soo/	そう	そお，そー
ばう（あそばう）	/boo/	ぼう	ぼお，ぼー

私見の大要については，拙稿「現代かなづかいを修正するならこうしたい」を参照されたい。

オ列長音を表わすには，「現代かなづかい」のように，オ列のかなに「う」をつける説，オ列のかなに「お」をつける説，オ列のかなに長音符「ー」をつける説との三種があり，それぞれに一長一短がある。「現代かなづかい」では，オ列長音はおう・こう・そう，オ列拗長音は，きょう・ちょう・しょうのように，「う」をつけて書くことを本則としている。その適否を第一に検討したい。

第二には，「大きな」・「氷」などの語類の音韻はどう認定すべきであるか。「現代かなづかい」では，これを連母音と認めて，おおきな・こおりと「お」をつけて書くことにしているが，これらは長音と認めて，「う」をつけて書くべきではないかという点である。

(1)　この論考では，まず「現代かなづかいにおけるオ列長音」が，どういう歴史的根拠によって成立したかということを見るために，「歴史的かなづかいにおけるオ列長音」の表記体系を考察し，

①　オ列またはア列のかなに「う」または「ふ」を連結する様式で示される語類

②　オ列のかなに「ほ」を連結する様式で示される語類とがあることを述べた。

そして，「歴史的かなづかい」におけるそうした表記体系の「慣れ」も尊重するという立場において，「現代かなづかい」において，「う」をつけて書くオ列長音の表記体系が成立したことを明らかにした。この表記体系は，既成者と未成者，過現未をつなぐ橋としても，必要なことと考える。

(2)　次に「現代かなづかいにおけるオ列長音表記」の本則，すなわちオ列のかなに「う」を連結する様式が，現代の共通語を書き表わすのに適当であるかどうかということを，習得の負担の軽減，音韻の標差的機能の反映，歴史的かなづかいの伝統ということなどを総合して研究し，その結果，現規定は，実用的なものとしては適当であることを論定しようとした。

(3)　「現代かなづかい」では，オ列のかなに「お」を連結する様式に従う場合は，オ列長音ではなく，連母音であると認定している。そう認定したゆえに，そのほかのオ列長音と別の「お」をつける表記を定めたのである。(「現代かなづかい」細則第九条)

しかし，これについて，普通の学説および一般人の言語意識においては，オ列長音であるとしている。そしてオ列長音のうち，この種のオ列のかなに「お」を連結する様式は，小中学生を対象として行った各種の実態調査の結果および音韻と文字との一対一の対応という「現代かなづかい」の原則に照しても，この種の語類は，オ列長音表記の本則「う」に統一すべきである。この点について「現代かなづかい」は補正が必要であることを述べようとした。

なお，この研究に対して，特に協力を与えられた福山隆士氏その他の方々に心から感謝するものである。

I　「現代かなづかいにおけるオ列長音表記」成立の歴史的根拠

1　「歴史的かなづかい」におけるオ列長音表記の体系

(1)　漢語におけるオ列長音・オ列拗長音表記の体系

現代かなづかいにおけるオ列長音表記の問題について

井之口有一

目　　次

序
Ⅰ　「現代かなづかいにおけるオ列長音表記」成立の歴史的根拠
1. 「歴史的かなづかい」におけるオ列長音表記の体系
2. オ列長音における「歴史的かなづかい」と「現代かなづかい」との関連
Ⅱ　「現代かなづかいにおけるオ列長音表記」の批判
1. オ列長音かなづかいの沿革
2. オ列長音かなづかいの書記力の実態
3. 「オ列のかな＋ウ型」の表記は，実用的立場において妥当である
Ⅲ　「現代かなづかい」における「おおきな」（大）・「こおり」（氷）などの語類の表記に対する批判
1. 「大きな」「氷」などの語類のかなづかいの書記力の実態
2. 「大きな」「氷」などの語類のかなづかいに対する制定者の見解
3. 「大きな」「氷」などの語類のかなづかい補正私案
〔付〕　参考文献

序

かなづかい問題は，明治以後，漢字問題とともに国語問題の中心課題として論議され，文部省の国語調査機関で立てた改定案だけでも数度に及んだ。が，ようやく戦後になって，国語審議会の答申した「現代かなづかい」が，昭和21年11月，内閣訓令・同告示で公布実施された。これまでのことは拙著「明治以後のかなづかい問題」〔文部省編「国語シリーズ」〕に詳述してあるので，それに譲ることにする。

しかし，「現代かなづかい」を実施してから，8年有余の実践を経た現在，その実践の結果に鑑みて，今や再検討が重要問題として，国語審議会でも採り上げられている(31年3月現在において)。

「現代かなづかい」修正の可否については，種々な意見があるが，現状維持論ともいうべきものに，現行のものの疑義を解いて，そのまま行われるようにせよという意見があり，また修正意見の一つとして，例外規定を取り除いて，音韻主義を確立せよというのがある。修正の可否は，にわかに決定し得ない重大問題で，その可否を決するのには，種々の観点から，精密調査と総合的研究とを必要とする。これにもとづいて国家の国語審議機関で慎重に審議し，その試案と経過とを公表して，大いに世論を聴いて後，適切な実施的処置を講ずべきものと思う。

わたしが，「現代かなづかいにおけるオ列長音表記の問題」の考察を試みるのは，この問題に検討の資料を提供して，各方面の批判を仰ぎたいためである。このささやかな論考が「現代かなづかい」確立のために，何らかの役に立てば幸である。なお「現代かなづかい」に対する